

ART ESSAY

アート★エッセイ

「竹の銀河の未来」

三代澤 信寿
(造形作家)



美しいこの国の先人たちは、素晴らしい知恵と美意識で、私たちにさまざまなものや、物語を残してきた。その中で竹は、私たちの暮らしの中で、美しく豊かに羽ばたき、世界に誇れる文化を支えてきた。和食やお茶の世界、建築の中で使われて、今も鮮やかに生きているものもあるが、プラスチックや金属に負けて絶滅したものや、絶滅寸前のものである。いまや多くの竹林は見放され、邪魔者扱いをされているようだ。

私は布や和紙を使って、世の中に無い、見た人に感動を与えるものを作ろうとしてきたが、新たに、身近にある竹に目を向け、私の作品に加え、次の世代に繋げようと思った。



竹の銀河

いいアイデアが見つからないまま、竹を手にして3年目、表皮を薄く削いだ竹を、太陽にかざしてみたら、透過した光が赤く見えた。そのとき、竹取物語のかぐや姫が脳裏をかすめ、見つけた！と心の中で叫んだ。六面体に加工した竹に、電球を組み込み、切り込みや穴をあけたところから洩れた光で、満天の星を表現して、「竹の銀河」と名前をつけた。

総合学習の授業で、学校に出かけるときは、まず子どもたちに、父母、祖父母などに、今まで使ってきた、竹で作られたものの絵を、紙に描いてもらってくるように宿題を出している。家庭で、竹をテーマに会話が成り立つはずだ。当日、校庭に集まった子どもたちと一緒に、竹林に行く。竹に頼っぺたをくっつけよう。冷たい！と声があがる。足元の落ち葉の匂いをかいでみよう。臭い！そうくさいんだよ。切った竹を皆で担いで校庭に並べ、長さを測らせ、節の数を数え、その数字を地面に書かせる。一番長い竹を校舎に立てかける。3階の屋根を超えた長さに歓声があがる。五感を使って竹と親しんだ後で、二本ずつ持った竹でカタカナやアルファベットをつくる文字遊びをする。そのあとで、ノコギリやドリルを使って造形の作業に入る。さて何が生まれるのだろうか？ 未来が楽しみだ。

(みよさわ のぶとし)

特集 授業の極意 第1回 絵画の巻

ノートの片すみ

学力低下論がわきおこり、各教科における生きる学力とは何かの問題提起した現場でも、学力を資質や能力として語られることが多くなってきた。美術や図工における資質や能力を認め、高め、育てるための内容や指導法について再考する時がきたのではないだろうか。

日頃の学びの過程を見るためにノートを提出させた教科の仕事を手伝う機会があった。あくまでも、生徒理解のために手伝っていたのだが、久しぶりに絵が描かれているノートを見つけ、うれしかった。他の子どもたちのノートはびっしりと赤や青のペンで色分けされ、美しくまとめ記入されている。絵が描かれているノートは、字は美しさとはほど遠く、なぐり書きであったが、絵はとてついでに描かれてあり、私の目を楽しませ、なつかしく、心ひかれるに十分なものであった。

授業中に彼は何をしていたのか、何を思っていたのか理解できた。黒板に記された授業の内容からインスピレーションを受け、徐々に彼は自分の世界に没入していったのであろう。初めは単純な形だったのだろう、次のページにはその世界が広がりまた緻密になって描き加えられている。彼が絵を描いている時は我を忘れ、時間が止まり、創造の世界に遊んでいたのである。その絵には完成がなく、常に新しいイメージのゆらぎと彼独自のこだわりの中で絵の世界が更新されていくのであろう。私が見る限り、中途半端な絵でさえ彼の世界が刻まれているのだから、未完成とはいえ、作品として評価できるものであった。

自分にこだわりをもち、我を忘れながら描き続ける行為は、創造的に思考し、生きる学力につながるものではないだろうか。

美術や図工の時間“絵”を通して子どもたちと向き合い、子どもたちが目を輝かせ、楽しむ指導の技を身につけたいものである。

絵画指導の極意

—「オリジナル色紙をつくろう」～「4枚綴りの絵」を例にして—

東京都台東区立平成小学校 安倍 啓斎

はじめに

まず真剣勝負が大事だ。相手は目の前の子どもたち。この子らにどれだけ活発な活動の場面と、夢中になれる時間を用意できるかが勝負だと考える。

初めにモダンテクニックを使った絵の具遊びから面白い(美しい)色や模様、触感の色紙をつくる活動を行う。ここでは特にさまざまな触感のテクスチャーがつけられるように用具・材料を用意しておくことが児童の意欲を喚起するのに重要となる。

活動を面白くする準備の極意

個人持ちの水彩絵の具に加えて、共同絵の具、チョーク、粉絵の具、木工用ボンドなどを加えるとかかなり幅広い表現が作り出せる。チョークは普通の色チョーク以外に蛍光色のものを用意しておくときれいな色調がつけられる。用具もローラーやクシ、ぼかし網などに加えて、霧吹きをテーブルに1本用意することでさまざまな水の効果を作り出せる。最近では100円ショップで、図工で使えるさまざまな用具が購入できるので、霧吹きや絵の具など安価で購入するのに利用するとよいだろう。

最初は子どもたちに個人持ちの絵の具を使って今までの経験を生かしてさまざまな試みをさせよう。この活動は、心が解放されて柔軟な発想を生む準備体操といったところだろう。使うのは八つ切りの色画用紙だが、さまざまな色を用意しておく。黒は絵の具などの色がきれいに発色するので、多めに用意しておこう。

児童は自分なりに試すが、なかなか活動が広がらなくなってくる時がある。そのような時を見計らって新たに共同絵の具や木工用ボンド、チョークを材料として提案する。このとき粉絵の具はまだ出さない。共同絵の具を出すことで一度に使

える絵の具の量が増える。そうなる活動もダイナミックになっていく。

水と絵の具を操る秘伝書

共同絵の具をチューブから垂らして手早くふると細い鋭い線が描ける(ドロッピング)のを発見する児童が現れる。(もし発見する児童がいなければ教師が実演するなどして提案する。)ちなみに柔らかなめの溶き方の絵の具の方がうまく細い線ができる。(ぺんてるクラス用ポスターカラーでは白と青がきれいに線ができる。)いろいろな色をドロッピングして線をつくっていく方法もあるが、そこに霧吹きを加えることで水の効果も生まれる。霧吹きで水を画用紙にかけた上に絵の具をドロッピングした場合とドロッピングした上に霧吹きで水をかけるのではできる模様(テクスチャー)は全く違う表情を見せる。実はこの発見は教師がしたものではなく、児童がさまざまな実験を繰り返すうちに発見し、教師に伝えたものだ。

まさしく、心を開放して柔軟に手や目や心を働かせた成果といえるだろう。加えて友達同士のかかり合いも重要な要素となっていた。一人が試したことを見て他の友達が違うやり方を試みる。そんな連携があって活動方法を広げることができたからだ。

粉の魅力を生かす秘伝書

次に児童がよく発見する活動は、ローラーなどを使って絵の具を塗り広げた上に、チョークをぼかし網で削ってできた粉を振りかける方法である。絵の具の上に粉の色を振りかけると柔らかい質感が生まれる。ここで注意したいのは子どもは粉を振りかけることに夢中になって絵の具を塗っていない部分まで粉を振りかけてしまうことだ。何も塗っていないので当然粉は定着せず落ちてしま

う。必ず絵の具やボンドを塗った上に粉を振りかけるように指導したい。あわせて木工用ボンドを水で薄めて溶いたものをプラスチック容器に入れて用意しておく、画用紙の地の色を生かして粉を振りかけることができる。

活動を重ねるうちにさまざまな方法を組み合わせる複雑なテクスチャーをつくる活動が見られるようになる。そのころに粉絵の具を提案する。(上記のチョークの粉の経験を生かし、粉を画用紙に定着できるようになるまでは粉絵の具は出さない。)絵の具やボンドを塗った上に粉絵の具を振りかけ、さらに霧吹きで水分を与えると粉は画用紙に定着する。木工用ボンドを混ぜて厚みのある絵の具の層をつくり、クシでひっかけ、その上に粉絵の具を振りかけて霧吹きでにじませるなどさまざまな方法を組み合わせる楽しさや広がっていく。「やりすぎだよ。」と思うぐらいの活動が、乾燥した際に意外と面白い表現になっている。画用紙が絵の具と水でぐちゃっと柔らかくなるので画板にビニルを張ったものなど防水加工した板を用意しておく乾燥棚までの移動が容易にできる。

みんなの知恵を出し合って絵に表す

自分でつくった色紙はそのままでも十分すぎる表現となるが、さらにその紙をコラージュして作品にしていく方法を私はとっている。(とはいっても、「この紙切りたくない。」という子が現れたときはその紙は名札(題名)を付けて作品として残すようにしている。)

一人で活動する方法も試みたが、テーブルごとのグループで活動した方がおもしろみが増すと考えている。それは、色紙をコラージュするという方法に起因している。紙を切り貼りするので、紙の交換が自由に行える。構図を決めるにも切って置いて、見て、感じを確かめてから決定できる。気に入らなかつたら違う紙に交換できる。このようにプラス、マイナスが容易に行えることで、友達同士の考えを交流させながら柔軟につくり替えながら活動できる。(絵の具で描く活動だと、そう簡単にそれぞれの児童の考えを出し合っ画面を変更することはできないだろう。)

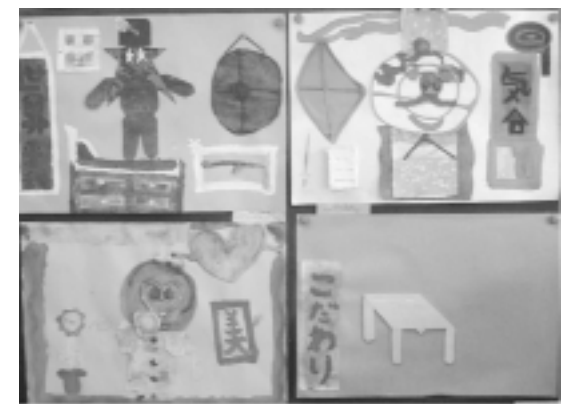
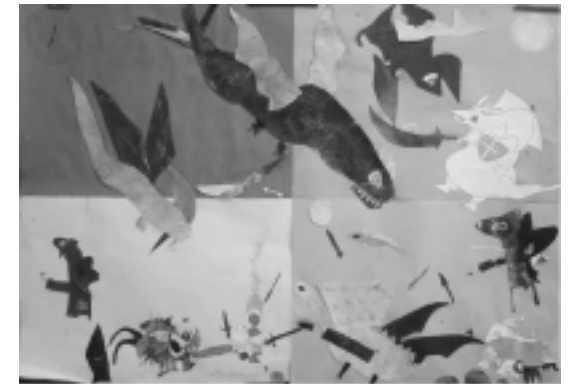
自分たちでつくった色紙をコラージュする紙は四つ切りの色画用紙を使っている。紙間屋に行っ

てさまざまな色や質感の紙を購入している。全紙で買って教師が四つ切りのサイズに裁断しなければならぬのが大変だが、それだけの効果はある。手間をおしまないことが活動を充実させるコツだ。

何をどのように…発想を広げる極意

一人1枚の四つ切りの色画用紙を手にするわけだが、それを4つの場面を考えてつながるように表したいテーマを考えてもよいし、始めから4枚の画用紙をつなげて大きな画面にしてそこにそれぞれの児童が表したいものを切り貼りしていてもよい、そんな教師の提案を行なった。ここはどのような表現を創り出すか、各グループのアイデア次第ということか。子どもに表現内容や表現方法を委ねることにより自分たちで主体的にかかり合いながら表現を開いていくことをねらっている。

(あべ ひろなり)



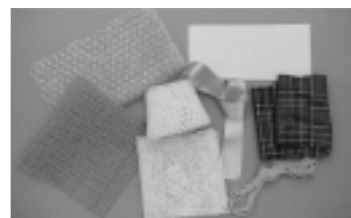
紙版画の指導

—「主人公あらわるあらわる」(第3学年)の学習から—

埼玉県戸田市立芦原小学校 長尾 宏一

1 材料の面白さに関心を寄せて集める

この題材は、紙版に布や毛糸など身の回りにある柔らかい材料を加えた版画表現です。材料のテクスチャーが写ることで子どもたちに版画の面白さを感じさせることができます。材料を集める課題を出すときに、何か材料にインクをつけて刷ったものを見せると材料集めへの興味・関心が高まります。リボン・レース布地・緩衝材など柔らかで薄手のものを集めるように伝えます。



2 導入で刷りを見せる

私は、題材の導入で自分がつくった版にインクをつけて刷って見せるようにしています。子どもたちは、きれいに版が写るのを見て、題材への関心・意欲を持ちますし、版に身近な材料を使うと面白いということを目で理解します。

次に、どんな主人公を版でつくりたいかを話し合います。人、動物に限らず、乗り物や花など子どもたちの考える主人公を黒板にいっぱい書き出します。なかなか思いつかない子も、みんなの考えをヒントに発想していきます。



3 版づくりのポイント

版づくりは、まず厚紙(白ボール紙)で表したいものの部品づくりをして、それをつなぎ合わせるということを動物などを例にしてやって見せます。その際、鉛筆などで形を書いて切り取るのではなく、いきなりはさみで形を切り取るように伝えます。鉛筆で書いてからだと、版の大きさが小さくなったり、形に子どもらしい伸びやかさがなくなったりしてしまいます。

部品ができたらすぐに貼り合わせるのではなく、動物なら首や手足を色々な方向に動かして、どんなポーズにするか考えるようにします。

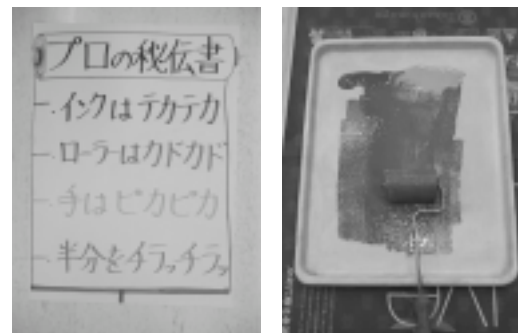
厚紙で形ができたら、そこに柔らかい材料を切って貼ります。ビニル製の物はのりや木工接着剤ではつかないので、化学接着剤を用いるようにします。厚手の材料を貼ると、厚紙につけたインクが写らないことがあるので注意が必要です。綿は、インクをつけるときにローラーに絡まったり、鮮明に写らなかったりするので避けた方がよいでしょう。

主人公の版ができたら、他に登場させたいものをつくるようにします。



4 刷りのコツを伝える

インクのつけ方と刷り方を教師がやって見せることにより、そのコツを子どもたちがつかめるようにします。「プロの秘伝書」を示し、そのキーワードを考えさせることから始めます。ちょっとナゾのところ子どもに心に留まり、自分でやる時に言葉を思い起こしながら注意して活動する姿が見られるでしょう。



まず、練り板をたくさん用意して、様々な色をつくれるようにします。インクは、練り板に1色ずつでもよいのですが、2色を並べて出して単色でも混色でもできるようにします。たくさんの色の組み合わせを設定しておくことで色彩豊かな版画の作品ができます。また、一つの練り板の上でも2色の混ぜ具合によって微妙に違う色ができます。2色が完全に混ざらない状態も面白い色合いになります。

子どもたちは、インクが少なすぎたり多すぎたりしてうまく版を刷れないことがほとんどです。適量にインクをつける様子を見せることが必要になります。インクは少しずつ練り板に伸ばし、ローラーにインクがべっとりとつかないようにします。練り板に伸ばしたインクをつけては版の上を転がすことを繰り返し、版を斜めから見ると均一にテカテカと反射する状態になったのを確かめるとよいことを伝えます。

いろいろな材料をつけた版はローラーを平らに転がしても、厚紙にインクがつかない部分があります。そのようなところは、ローラーの端(カド)を使ってつけることを教えるとよいでしょう。

版に凸凹があるので、刷るときはバレンよりも指がいいでしょう。手をきれいにしてから擦ることを確認します。

擦っていると、インクが定着した部分は透けて見えますが、紙をめくって確かめる必要があります。版がずれないように半分を押さえてめくりまわします。インクがついていない部分を見つけてまた擦ります。残りの半分も同様にします。

5 刷りからお話を膨らませて

主人公を刷ると、子どもたちはお話を考えて他の版をつくって刷ったり、型押しをしたり表現を広げていきます。表現しながら発想を膨らませる活動は子どもの内側から生まれるとても大切な表現行為です。(ながお ひろかず)



絵画指導のABC再考

北海道札幌市苗穂小学校 伊藤 聡美

画材を選ぶ

どの学年にどの画材が適当なのか、どの題材にどの画材が適当なのか、再考してみましょう。

「1年生にはクレヨン」とか、「クレヨンを卒業したら絵の具」というように決めつけていませんか。

例えば筆圧の弱い低学年の児童には、ペンも有効な画材であるといえます。黒い油性ペンで描いてからクレヨン・パステル・カラーペンなどで色を着けたり、絵の具で模様を着けた画用紙にペンで描いたり、さまざまな使い方ができます。

また、高学年の児童にパステルを使わせると、非常に巧に使いこなします。それは、扱いやすいからです。絵の具と比べると特に。

「絵を描く＝絵の具」と安易に考えず、さまざまな画材を子どもたちに提示し、体験させたいものです。

紙を選ぶ・選ばせる

その題材によって、適当な紙を選びます。

◇材質

- ・水を吸いやすい紙(和紙・画用紙等)
- ・あまり吸いやすいとはいえない紙
(白ボール紙等)

- ・クラフト紙

◇色

- ・白い紙
- ・色紙 (色画用紙・白ボール紙の裏等)

◇大きさ

- ・四つ切り
- ・八つ切り
- ・四つ切りを正方形にしたもの

・八つ切りを正方形にしたもの
等、題材によって、教師がどの紙を使うのか決める場合もあり、児童が幾つかの中から選ぶ場合もあるでしょう。

絵の具の使い方をしっかり指導する

絵の具は前述したように、他の画材と比べると、比較的扱いが面倒な物です。準備の仕方・筆の扱い方・片付け方などを、時間はかかりますが、初めにしっかり指導することが大切です。

◇水入れの使い方

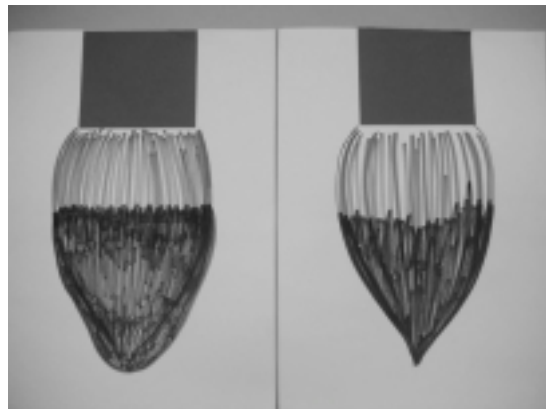
3つまたは4つの区切りに半分くらいずつ水を入れ、筆を洗うときにどの順番で使っていくか、1番目2番目3番目……と番号をつけさせる。筆洗いをいつもその順番で行うと、最後の区切りの水はほとんど汚れない。従って、何度も水入れの水を取り替える必要がなくなる。

◇水入れの置き場所

筆を持つ手の方の足下に。

◇パレットへの絵の具の出し方

◇筆に含ませる水の量



絵の具はここが勝負所。経験がものを言う。どんな効果を狙うのかによっても大きく違うので、様々な技法を試す機会を与えたい。

◇筆に含ませる絵の具の量

筆の先がとがるように、パレットの縁で余分な絵の具を落とす。

◇塗り方

塗りの方向や枠内をはみ出さずに塗ることを、徐々に指導する。

◇筆洗い

しっかり洗わないと、筆の中に残っていた色が次の色に混じって、濁ってしまう。

◇パレットの絵の具の始末

等々、絵の具についての指導は大変ですが、これらを導入時にしっかりと行っておけば、その後が楽なのです。

上記の他にも、絵の具セットのバッグをどこに置くか、絵の具チューブケースをどこに置くか、水入れの下に雑巾を敷くだとか、水を汲みに行くときには必ず雑巾を一緒に持って行くだとか、生活態度に大きく関係のある事柄が多く、作業や活動の際に「きちんとした作業をさせる」「道具を丁寧に扱う」といったことを教えるのには、うってつけです。また、枠内からはみ出さずに色を塗るということは、あらゆる場面で養っておく必要があります。色鉛筆でのぬりえ然り、掃除の際の机の拭き方然り、です。

描き始めるまでの時間をどのくらい与えるか

題材によって、児童のイメージを膨らませる時間や構想を練るために与える時間は違います。

例えば、お話や音楽を聴かせた後に絵を描かせるのであれば、その場ですぐ描かせた方がいいでしょう。しかし、画材や紙を自分で選択させる場合や実際に何を描くかを自分で決めるような題材の場合は、オリエンテーションの後、1日から数日おいてから描かせた方がいいでしょう。

褒める

よく言われることですが、褒めましょう。技法が稚拙でも表現がブアでも、とにかく褒めましょ

う。部分的に、でいいのです。「このこの色、いいね。きれいだね。」「この木、よく見て描いたね。素晴らしい枝振りだね。」「上手に描いたね。にこにこ顔がかわいく描けてる。」等。子どもに勘違いさせるのです。「もしかしたら、私って、絵が上手になったのかも……。」と。これは確実に次の意欲に繋がります。なかなか心を開放できない子ども、何度も褒められるうちに自分が認められていると気づき、心を開くことができるようになります。ただし、その後の評価のこともありますから、やり過ぎはいけません。「あのとき、先生は僕の絵をすごく褒めてくれたのに、通知表では○がついてない。なぜ??」というようなことになっては困ります。

題材の系統性の把握

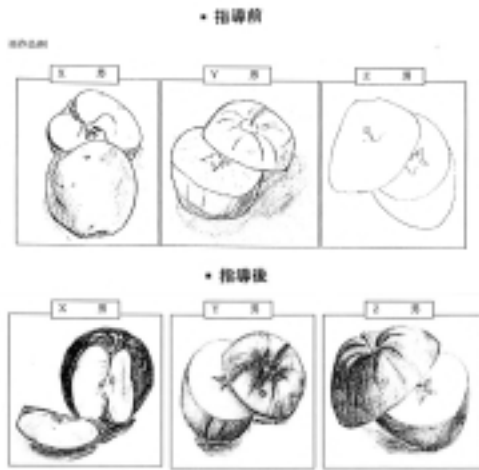
想像力を働かせて描く絵やイメージを膨らませて描く絵ばかり描いてきた児童に、急に建物の写生をしろ、人物をよく見て描け、と言っても無理です。小学校の6年間で、図工の題材がどんな系統になっているのか、何年生でどんな活動をするのか、そのためには、それ以前にどんな力を付けておかなければならないのか、ということ、指導者がよく把握しておく必要があります。想像力を働かせて描く絵にも、イメージを膨らませて描く絵にも、「よく見て描く」要素を取り入れながら指導するとよいでしょう。

(いとう さとみ)

—極意— スケッチ能力を高める

青森県つがる市立稲垣中学校 山内 久

はじめに



まずは、3名の生徒作品をみてください。上段は指導前の作品です。下段は指導後のものです。明らかに、その違いにお気づきかと思えます。

X男はスケッチ能力が高いです。最初のスケッチでも「十分満足できる」状況にあり、質感もある程度表現していました。2時間目からは、リンゴを縦4分の1に切断させ、真正面からのやや難しい視点でスケッチをさせました。難しい課題ではありましたが完成度の高い作品です。しかも、鉛筆の濃さがリンゴの赤みも感じさせます。

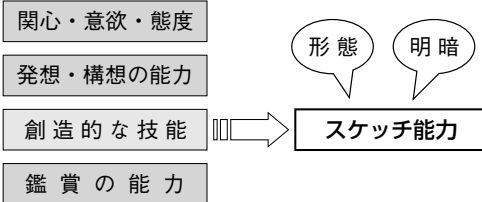
Y男は形態表現すなわち形は描けますが、明暗表現が十分でないため立体感に欠けます。ハッチングの線の方向や重なりについて指導しました。本人は満足できる作品に仕上がったと感想を述べていました。

Z男は形態も明暗表現もうまくとらえることができずでした。形態をとらえることができない生徒の場合、描く順序を工夫させることにより、スケッチが格段にうまくなります。リンゴの中心部「芯」の部分から描かせるとよいでしょう。この

ことにより、対象を〈輪郭線〉としてではなく、〈量感〉として表現するようになります。その際、ハッチングの線の方向を芯から外側に向かうように描かせました。リンゴの凹凸が見事に表現されています。

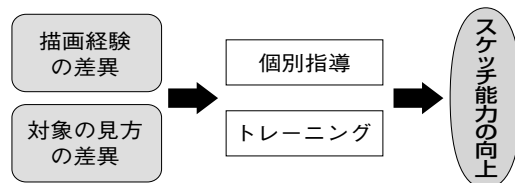
極意1 題材のねらいを明確に

題材名「切断したリンゴを描く」(第1学年・3時間)



上に示されてあるように、本題材のねらいは、中学校美術科観点別評価のうち、創造的スキルの一つであるスケッチ能力を高めることにあります。題材を通じて、どのような資質・能力を身に付けさせるのか、また、指導のポイントは何かを明確にして授業をしなければなりません。スケッチ能力を高めるためには、「形態をとらえること」「明暗の階調表現ができること」が大切であり、指導のポイントはここにあります。

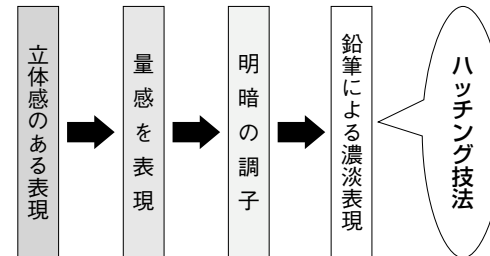
極意2 繰り返してスケッチを



スケッチ能力は、これまでの描画経験や観察力(認知能力)により個人差があるのは当然です。ですから、個に応じた指導が必要になります。能力の差異を認めながらも、すべての生徒に「おおむね満足できる(B)」状況以上の能力を身に付けさ

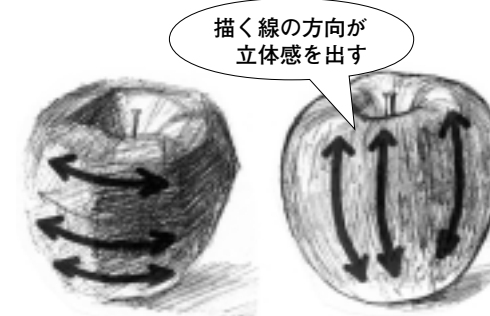
せなければなりません。そのためには、生徒一人ひとりのつまづきを把握し適切にアドバイスし、「できない部分」をできるように、スケッチを繰り返し行うことが大切です。その際、八つ切りサイズのケント紙(またはさらに裁断したもの)を与え、描くことへの抵抗感をできるだけ軽減してあげましょう。これら能力は、指導したからといって、すぐに身に付くものではありません。繰り返し行うことにより、次第に高まるものです。

極意3 「ハッチング」がキーワード



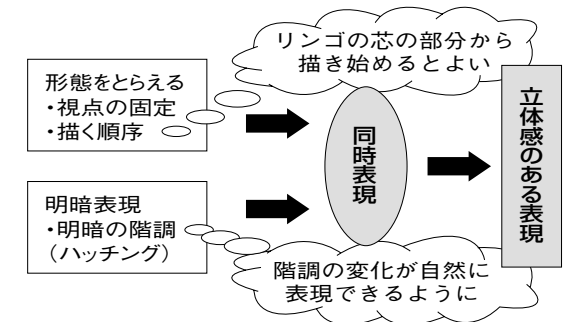
上に示されているのは技法上のキーワードです。「立体感」を出すためには「量感」を、「量感」を出すためには「明暗」を、「明暗」を出すためには「鉛筆による濃淡」を、「濃淡」を出すためには「ハッチング技法」が効果的です。ここでは、特に「ハッチング技法」を中心に学習することになります。

●ハッチングとは、線の重なり(粗密)によって明暗表現する技法。



さて、「ハッチング技法」とは何か。それは線の重なりによる明暗表現技法の一つです。線が縦、横、斜め、そして縦と重なることにより、線が「密(みつ)」になり、その部分が暗く見え、一方、線が「粗(そ)」になると明るく見え、「光が当たった」感じになります。また、線の方向により、リンゴの基本形である「球体」を表現できます。

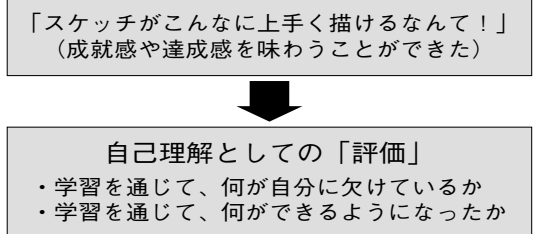
極意4 形態と明暗を同時に表現



形態を輪郭線のみで表現しても立体感は出ません。常に、対象の形態と明暗を同時に表現させることです。その他、指導のポイントを述べます。
●明暗の階調変化(グラデーション)で表現させる。つまり、明暗の変化を数段階で表現できるようにすること。

この表現には「ハッチング技法」が効果的です。
●形態を正確にとらえるためには、視点を固定するとともに、描く順序を指導することが大切。往々に、絵の不得意な生徒は、外側の輪郭線から描き始めますが、正確に形態をとらえることができません。そこで、本題材では、リンゴの「芯」、つまり中心から外側に向かって描かせます。

極意5 評価を大切に



「評価」は、教師にとって、指導を振り返り、授業改善に生かすことができます。一方、生徒にとっては、授業を通じて、「今、自分は何ができ、何ができないのか」を自己理解し、次の学習への目標を持ち、努力するきっかけになります。

「評価」が個々の能力に応じた指導に生かされるとともに、生徒の意欲喚起にもつながります。是非、評価を大切にしてください。

(やまうち ひさし)

子どもの椅子

FROM

埼玉県川越市立霞ヶ関小学校
高野 敏



何年前でしょう…。5年生の
図工の時間。自分の中にあるい
ろいろな感情を表現している場
面。一人の女の子が自分の中に
自分でもよく分からない、不思議な部分がある…と
言い出しました。その不思議な部分をどう
表そうか、その子は絵の具の筆
を片手に悩んでいました。

「せんせえ～、どうやったらい

いかなあ」

図工室の壁にはいろいろなモ
ダンテクニックのやり方や見本
が提示されていたので、「あの中
のどれかでも、不思議な感じ
が出せるんじゃない？」と言うと、
真ん丸に見開いた目で
「え！やっていいの？」
と言ったのです。

4年生でモダンテクニックを

体験できる題材が用意されてい
ます。当然その子も体験してき
ているのです。しかし、「え！や
っていいの？」という一言から
分かったとおり、その体験は4年
生のその時間のものであり、そ
の他の何ものにもなっていない
のでした。(それじゃだめなんだ
よなあ。)初めて私にそう考えさ
せてくれたできごとでした。

子どもたちが図工の時間の中
で体験することは、全て一人ひ
とりの『引き出し』としてその
子の中に蓄えられ、増やしたり
整理されたりしていくものでな
ければならないのではないでし
ょうか。(図工って、作品がで
きたら終わり！っていう感じが強
いので…)その題材に取り組む

中での体験や発見を、どうした
らその子が自分の中のいつでも
使える『引き出し』にできるか？
そこで始めたのが写真による
ふり返りでした。

最初は、完成作品の写真を撮
って見ながら子どもたちが自分
の活動をふり返るのです。写真
を…と考えると、どうしても作
品を撮っていましたが、作品の
写真を撮っても仕方がないと思
い始めました。作品からでは、
その途中で発見したことは思い
出しにくいからです。だいたい、
作品は目の前にあるし、造形遊
びでは、作品にならない場合も
あります。意識して、子どもた
ちがやっている姿、表情、さら

に成長を探しました。…難しい
です。でも、そうやって撮った
写真を、活動後に渡してふり返
りをする、子どもたちの言葉
の中に、「ああ、この子は『引き
出し』を増やせたなあ。」と思
える部分を多く感じることがで
きるようになりました。

【彫り進み版画】

「今回は、色の重なりがすごく
面白かった。いかに全ての色
を目立たせるかを考えました。切
り抜いた車を目立たせたいか
ら、周りはこの色にしておこう
…と考えました。」

「きれいな色になった時はうれ
しかった。色が重なると面白い
なあ～と思った。」

【小学校最後の絵】

「肌の色をつくるときに、つく
った色を手につけて、肌の色に
似ているか確認しました。」
「よく見ると角度が違う！その
谷も1本の線を入れるだけで遠
い所と近い所を表せる！」

子どもたちの『発見』を聞か
せてもらい「そりゃあすごい発
見だ！」と一緒に喜び、子ども
たちの代わりに「うわ！そこ
までこだわったのか！」と驚く
のが好きです。おっ！また『引
き出し』一つ増えたね！そうい
う瞬間だからです。

(たかの さとし)

図工室

美術室

二年に一度のドキドキ展覧会
が終わってほっとしています。
なぜドキドキかという今年は
新しい試みとして舞台発表を取
り入れ、オープニングに音楽集
会をもったからです。

3・4年生が体育館(図工の
立体作品、平面作品、家庭科作
品が展示されている中)で発表
しました。どちらも音楽と図工
の合科の発展です。

3年生「〇〇のすきなまほう
つかい」。おかしなすきな魔法使
いという曲を子どもたちで替え
歌し、音づくり。そして帽子や
衣装づくり。当日は魔法使いに
変身して歌い、演奏しました。

4年生「リサイクル楽器で演
奏」。いろいろな空き缶、ラップ
などの芯、共鳴させるための箱

などを集め、音の出る仕組み(空
気の振動・叩く・弦を引っ張
る)を生かした楽器をつくり、そ
の音のイメージからの曲づくり、
といった内容です。

3年生はゲームの好きな魔法
使いが出てきたり、きらきら衣
装があったりと現代っらしい
感覚でユニークでした。4年生
の楽器からは民族楽器のような
素朴な音、レインスティック風
楽器からの波のような音など。
リサイクルでこんなこともでき
るのかと興味深げに、全校児童
163名が3・4年生の発表に聴
き入っていました。

他の教科と関連して

敷地 和子(東京都世田谷区立世田谷小学校)

私は他の教科と関連した図工
に積極的に取り組むように努力
しています。今回の展覧会の取
り組みもその一つです。今、心
を育てることの大切さを求めら
れています。図工はまさに心を
育てる教科です。現状は高校の
履修不足や芸術教科時数削減に
見られるように軽んじられてい
ます。だからこそ他の教科と関
連した取り組みで時数を確保し
て、図工教育を通して子ども
たちの心の育ちをアピールしてい
きたいと思います。

(しきち かずこ)

今、野外造形展について思うこと

石橋 一美(愛知県豊橋市立高豊中学校)

誇らしげに父親の手を引っぱ
り自分の作品へと導く子どもの
姿。

それをみて父親は、
「上手につくったねえ。お父
さんも小さい時、こんな作品を
たしかつったなあ。」

2日間に渡る搬入、飾り付け
を終え、安堵感と心地よい疲労
感を抱え、本部テントで会場当
番をしていると、このような場
面を多く見かける。

今年で、49回目を終えた子
ども造形パラダイス(豊橋市立小
中学校図工美術研究部主催の野
外造形展)でも、このような場面

は多々見られた。教室での私
たちの悪戦苦闘や試行錯誤など
の悩みを忘れさせてくれる微笑
ましい場面である。このような場
面での父親の多くもまた、造形
パラダイスで育った子どもたち
であることが多い。誕生してか
らすでに半世紀を経過してきた
ことを物語る。

微笑ましいとともに、このよ
うな場面にはまた、私たちに次
へのエネルギーを与えてくれる。
造形パラダイスの生みの親とな
る先達の言葉に次のようなもの
がある。

「つくる みせる あそぶ 子

どもたちにとっては、これらは、
ひとつづきのことだ。子ども造
形パラダイスには、常にこの3
つが、絡み合って存在する。子
どもたちは、この子ども造形パ
ラダイスで、自分が楽しむだけ
でなく、友だちをつくり、つぎ
の表現へと意欲をかきたたせて
いく。」

教育現場に突きつけられた課
題が山積している今、私たち美
術教師の貫くべき信念があると
すれば、未来を担う子どもたち
に、この創造力と芸術性がいつ
までも生きつづけることが、い
つの日か市民の心の糧となるこ
とを信じていることである。それ
は後の世の美しい郷土の街づく
りへと発展していくことであら
う。

(いしばし かずみ)

自然との豊かな出会い

大阪府堺市立三宝小学校 橋本 慶子

遊び場探し

入学式を終え、間もない時期に、子どもたちに聞いてみた。

「学校の中で、どんな所で遊びたいですか。遊びたいと思っているところを二つ探してきてごらん。」

「どこへいってもいいの?」「○○ちゃんと一緒に探そう」「二つしかだめなの?」

子どもたちの大歓声が返ってきた。

自分たちで見つけた遊び場を絵に描き、その遊び場でしたいことを発表した。友達の見つけた遊び場を見て、「ほくもやりたい。先生、いつ遊べるんや」「えさを家から持ってきていいか」「遊ぶロープを持ってきていいですか」など、友達の発表に強く反応した。子どもの生活欲求の強さが、表現意欲を刺激したのである。



「森へ行きましようね～」

※本校は、市街地にある学校で、特に花と緑の学校作りを目指している。校庭の裏側に「憩いの森」と称した学校園兼遊び場が設置されている。

季節ごとに咲くいろいろな花や憩いの森をすみかとする虫は、子どもたちの大好きな遊び相手である。

憩いの森で遊ぶ

「長い首飾りを作ろう」「うわ、空がまぶしい」

「クローバーのおふとんは、あたたかいよ」「あまい匂いが、いっぱいするよね」



「クローバーのおふとんってきもちいいよ」

自然は、子どもたちの心を和やかにしてくれたのだろう。時間が経つにつれて、環境や場所をうまく生かした遊び(木登り、ぶらんこ等)や自然の材料を利用して遊んだ(変身ごっこ、はり絵、お弁当作り等)。自然に接していくことの楽しさをどの子どもも味わっていた。また、終了の合図のたいこを鳴らした時、「えー、もうちょっとだけ」と、子どもの意欲が声となって返ってきた。

動物と遊ぶ

「うさぎさんに、えさを持ってきた」と子どもたちが予想して持ってきたえさを見せあっていた。



飼育小屋の前で遊ぶ

活動中もえさを食べる様子を見て、小さく切ったえさの方をよく食べることや、かけっこをしたときにうさぎは草むらに、アヒルは水場に行くことから、好む場所や、そこにはえさもあることに気づいた。このように遊びを通して得た知識を言葉や粘土で表現することで、植物も自分たちと同じ生命体であることを意識し、より一層親しみをもち、生き物を育ててみたいという気持ちを強くした。

固定施設で遊ぶ

固定施設での遊びは、遊びの工夫に個人差が出た。例えば、鉄棒で連続逆上がりをリズムよくまわる鉄棒の得意な子もいれば、こわがって鉄棒にぶら下がることをいやがる子どももいた。また、活動中一人で遊ぶ子もいれば、グループで遊ぶ子もいる。グループで遊ぶ場合、順番などトラブルが予想されるので、約束や順番、安全などについて話し合いをさせた。このことは集団の中の一人ひとりの自主性、社会性の育成につながり、個人の伸長が集団の伸長につながり、集団の伸びが個人につながるのである。

★みんなできめたやくそく

- ・たくさんの人が、同じ場所で遊ぶときは、仲良く。
- ・飼育小屋の動物は、係のお兄さんたちに聞いてから。
- ・みんなで力を合わせて、きちんとかたづけを。

また、子どもたちから出てきたおもしろい動き、遊びに名前をつけさせることによって、子どもの動きや遊びが発展していく過程も明らかになった。子どもは活動を言葉や絵に表現することによって、活動の楽しさを再現すると共に、友達と楽しさの共有をはかっていったのである。

★子どもの作文

わたしは、きょう、のぼりぼうであそびました。つじのくんがじゃんけんまでけて、おにになりました。おにのじんちと人げんのじんちからスタートをして、はじめは1てん。つぎに2てんはいつてとうとう3てんになりました。とてもおもしろかったです。やすみじかんには、いちごグループの人とがったいしておしえてあげました。またやりたいです。

土の山・砂場で遊ぶ

子どもたちは、何回も自分の思う山(スクラッチ)を描いて、土のだんごでパチンコを作りたいとか、山の上からすべて遊びたいなど、土や砂での遊びのイメージをふくらませていた。活動に必要な準備物を子どもたち自ら考え、用意もした。

この活動は、遊びに熱中してくると、「ドッキング」といって、他の友達の遊びを吸収合併して活動場所も広がり、遊びの楽しさも深まっていくのである。子どもたちが土や砂という素材にかかわると、必ずだんご作りには土のほうがよい、砂はこわれやすいからだめ等と、体験からの知識で素材の性質を理解する。

土や砂を素材にして、泥人形やお誕生日ケーキなどの表現へ発展したり、土や砂に挑みどろんこになって全身的な造形遊びへ発展する。



へんしんごっこ

新しい生活の場が自ら生きる場

新しい環境に身を置くだけで、子どもは緊張しながらも好奇心に胸をふくらませていた。環境のもつ教育力、可能性を引き出し、子どもの活動への期待を高め、新しい生活の場を自ら生きる場であるととらえさせることが、この実践での最も大切な内容であったと言える。

体験、遊び、作業(表現)とどの活動も集団の中で行ったからこそ子どもたちはお互いに考えを出し合い、協力しながら経験の拡充を図ることができた。こうした活動の過程で、子どもたちは、動作や言葉、文や絵で対象から学び、発見したものを自己表現しながら、生きた知識を身につけていったのである。

(はしもと けいこ)

※本題材は、堺市立市小学校での実践である。

コラグラフと版を活かした段ボール額

山口県下関市立彦島中学校 山住 英朗

1. はじめに

版画の表現方法として「コラグラフ」がある。この版画は抽象表現を学習する上で有効的であり、比較的短時間で制作できる教材である。また、刷り上がった作品の完成度は高く、美術があまり得意でない生徒も、作品を制作することの喜びやおもしろさを実感していた。

以前は、その版は家へ持ち帰らせていた。しかし、さまざまな材質が貼りつけてあり、刷るためにいろいろな色が重なり合ったその版が意外に美しく、これを何とか活用できないものかと考えていた。

そこで、その版をオブジェとして考え、それを壁飾りとして活用できるように、段ボールによる額の制作を試みた。

2. コラグラフの制作

(1) 抽象絵画の鑑賞

ピカソやブラック、岡本太郎などの作品を鑑賞し、キュビズムや抽象表現のおもしろさに気づかせ興味をもたせる。

(2) 目に見えないものを抽象形で表現する

「喜」「怒」「哀」「楽」などの感情や、「夢」「心」などの「目に見えないもの」を線や幾何形や抽象形を使って表現する。

① テーマを決定し、下がきを考える

テーマを一つ決定し、それに沿ったアイデアスケッチを何枚か描き、下がきを考える。

② 版の外形を切る

版はベニヤ板ではなく工作紙を使い、外形を四角のままではなく周りを切って変形させる。

③ 物を貼りつけ版をつくる

段ボール、麻布、ひもなどを準備しておき、下がきに沿って材質感の違いや、重ね合わせの効果

などを考え、厚さ3mm程度まで物を貼りつけて版をつくる。

④ 白インクで一度刷り

水性版画インクの白を布で版にこすりつけ、プレス機で一度刷りをする。白で一度刷りをするによって、二度刷り以降の重ね刷りが淡く効果的になる。

⑤ 重ね刷りをする

- ・重ね刷りをするときには、布に少量のインクをとり、うすく伸ばすようにつける。
- ・水性インクの赤、黄、青、緑、朱などを布で版にこすりつけ、テーマのイメージに合うまで何度か重ね刷りを繰り返す。



コラグラフの作品



3. 段ボール額の制作

(1) 段ボールの特徴を知る

段ボールの表面を剥ぎ取ると、波型が整然と並んでおり、その美しい形状の特徴を知って、デザインに活かすことを考える。

(2) 段ボール額の枠づくり

段ボールの大きさは四つ切大で、上下8cm左右5cmを残して、真ん中を切り取り、段ボール額の枠をつくる。

(3) 枠のデザインを考える

- ・上下や左右対称の方がまとまりがあるが、自由な発想でデザインを考える。
- ・定規やコンパス、雲形定規やテンプレートなどの道具を使い、美しいデザインをする。

(4) 段ボールの表面を剥ぎ取る

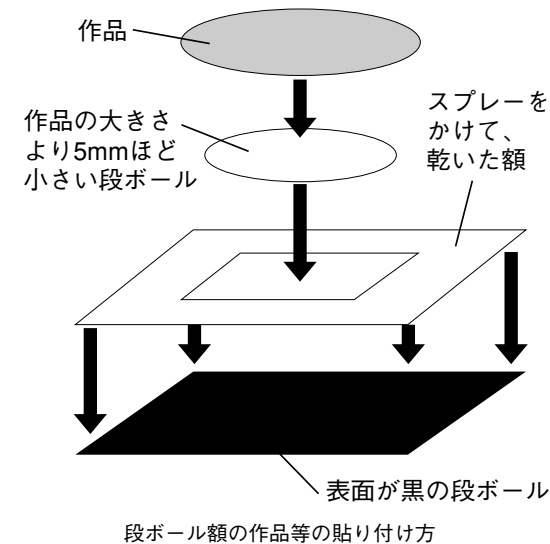
デザインした下がきの輪郭線にカッターナイフで切れ目を入れ、表面の紙だけをていねいに剥ぎ取る。

(5) 色づけ

- ・金と銀のスプレーを使って、枠の表面と側面、内側にまんべんなく吹きつける。
- ・新聞紙でマスキングするなどの工夫をすれば、より一層美しく仕上がる。

(6) 額、作品の貼りつけ

- ① 額を台紙段ボールに貼りつける。
- ② コラグラフの版を作品とし、貼りつける。
- ③ 裏にひもをつけて完成。



段ボール額の作品等の貼り付け方

4. おわりに

「コラグラフ」の制作では、重ね刷りをすることで、偶然性の美しさを発見することができた。重ねれば重なるほど色のおもしろさに興味をもち、とことん納得のいくまで色をつける生徒たちの姿が見られた。自分の作品にこだわりをもちたいという、前向きな姿勢を生み出してくれる教材だったと改めて感じられた。

「版を活かした段ボール額」の制作では、重ね刷りを何度もした「版」だけあって、それ自体が他では出せない微妙な色が美しく、味わい深い作品となった。そして、段ボール額では新たな作品として生まれ変わり、生徒たちもその仕上がりのよさにとても満足していた。

(やまづみ ひであき)



段ボール額の作品



生活にとけ込んでいるマンガ的表現

宮城県石巻市立二俣小学校 宮崎 敏明

石巻市は、太平洋に面した人口12万人の都市である。東北一の大河、北上川河口に位置し、江戸時代から舟運や海運で栄えてきた地域である。



5年前、「マンガ的発想が人を呼ぶ街づくり」というコンセプトに基づき、「石ノ森萬画館」がオープンした。ここでは、石ノ森章太郎の作品に登場するマンガキャラクターが数多く展示され、企画展やワークショップが盛んに行われている。

「石ノ森萬画館」は、マンガの特性である創造性、メディア性などを通して、豊かな感性や創造力を育む場となることを大きな目的とし、市民が集い交流できる施設としての役割を担っている。

さらに、JR石巻駅から「石ノ森萬画館」までの約1kmには「いしのまきマンガロード」があり、石ノ森作品のキャラクターが数多く設置されており、市民や観光客を楽しませている。



このような風土の中、浜辺の小学校で次のような実践を行った。

児童は、日頃から釣りを楽しんでいるため、学校行事としての釣り大会では、より大物を釣ってみたいと思っていた。そのため、釣ってみたい魚を描くことに高い興味・関心を示していた。

そこで、身近な貝殻や流木といった自然材料の

質感や形を生かしたり、これまでの釣りの体験を生かしたりして、釣り大会で「釣ってみたい魚」を絵に表した。



児童は、身近な自然材料の形や色から発想し、釣ってみたい魚への思いをどのように表現するか、自分なりに構想を練っていた。

さらに、自然材料を活用して画面構成を試みたり、前学年までに経験した用具を生かしたりして絵に表す活動を楽しんだ。



次に「釣ってみたい魚」ではぐくまれた釣り大会への思いを一層発展的に生かすために、釣り船に取り付ける90cm×100cmほどの大漁旗を描いた。

この題材では、絵に表す内容のイメージを広げ、色の調和的な配置や動きの感じなどの参考として本物の大漁旗を提示し、形や色を構想する能力を高める一助とした。

児童は釣り大会当日に、風になびかせながら動く大漁旗の色や形を眺め、大漁になることを願いながら釣り大会を楽しんだ。

大漁旗という平面的な造形表現を日常生活で目

にしている児童、さらにはマンガという平面的な造形表現が地域にあるという環境、これらは石巻地域に静かに、しかし着実に文化としての影響を与えている。風土を生かした造形教育を一層心がけたいものである。



さて、石巻地域では、現在「小中連携」の必要性を強く感じ、教育の連続性や発展性を十分図る実践を模索している。

造形ピックアップ

地域発信！子ども中心の造形教育

空知美術教育研究会事務局長 中澤 孝仁

今年度、三笠市立美園小学校を会場に行われた「第43回全空知子どもの作品を語る会」。主催団体である空知美術教育研究会(空美くうび)は、北海道の中央部、空知地方の図工・美術教育実践活動の中核として活動を続けている団体である。

「作品を語る会」とは車座になって子どもの作品を囲み、互いの悩みを語り、よさを発見し、それを明日の実践に生かす座談会である。ベテランも新卒も気軽な話し合いの中で指導法や教材観、図工・美術の教科性、さらには子どもの生活像まで語り合うという「自主的な研究実践の積み重ね」の場として位置づけられてきた。ピックアップされた数点の作品ではなく、指導したクラス全員の作品を持ちよることが大切である。それらの作品を見たり、意見を交換したりする中からつかみ取ったものを、現場での実践に生かす。それが私たちがこれまで43年間にわたり、一度も休むことなく続けてきた「作品を語る会」である。

また、近年は会場校の意向も極力聞き入れ、地域に還元できる大会を目指している。今回の大会ではメインとなる「作品を語る会」のほかに、模擬授業形式の「出前！図工室」や、さまざまな題材を実演紹介する「題材屋台村」を実施。参加者のみでなく、全校児童や参観保護者も一緒に造形活動に取り組んだ。

これまでも、図工部会と美術部会が一つの研究会として活動を行ってきた地域である。授業研究会では、小・中それぞれの授業を校種を超えて参観し合い、授業検討会を積み重ねたり実技研修会を行ったりしてきた。しかし、授業研究会や研修会以外の交流はほとんど見られずに各校での指導が行われてきた。

この問題を側面から解決するために、教科指導の考え方や方法などを少しでも明らかにし、それぞれの校種での教師の指導技術を高めつつ、開かれた、そして石巻の風土ならではの造形教育を実現していきたいと考える。

(みやざき としあき)



つつい自己満足になりがちな図工・美術の指導。諸先輩が築いた伝統を引き継ぎつつ、日々変化する現状に広くアンテナを張り巡らすため、多くの会員と語り合うことを大切にす会であり続けたい。

(なかざわ たかひと)

●ホームページのご案内

<http://www.ee-mise.com/~sorati-art/>

※空美のおもな活動としては「作品を語る会」のほかにも①会員作品展、②裸婦デッサン会、③新春ゼミナール、④実技講習会、⑤会報の発行(年5回程度)等を行っており、会員のみならず一般教職員や地域住民の参加も随時募っている。

さらに、メーリングリストやホームページも開設・活用し、会員相互の情報発信や交流のために役立てている。特にホームページの内容は充実しており、会に参加できなかった会員にも雰囲気や伝わるよう配慮されている。